

# 日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たち V

——日清・日露戦争期（一八九四—一九〇四）の

アレクサンダー・フォン・シーボルト——

牧 幸 一

## はじめに

日本人の長年の悲願であつた不平等条約が正式に改正されたのが、一八九四年イギリスとの通商航海条例の調印であつた。それに倣つて条約各国がこの日本との新たな改正された条約に調印したのである。イギリスとの交渉においてもアレクサンダー・フォン・シーボルト（以下アレクサンダーと記す）は影になり日向となつて日・英双方の外交官たちの間で活躍したことは、前稿で見た通りである（注1）。時の英国公使青木周蔵と二人三脚でアレクサンダーは良く日本外交を代表する外交官としてその勤めを果たした。英国の外務省の中枢部まで入つて、調印の段取りを裏方として取りつけたことは、特筆されてしかるべきであろう。そればかりか、調印寸前まで至つた八十年代末のドイツとの条約改正交渉も彼が深く密接に関わつていたことは、記憶に新しいであろう（注2）。時の外務大臣は大隈重信、駐ドイツ公使は西園寺公望、外務次官は青木周蔵。アレクサンダーは彼らと連絡を密にして交渉に当り調印にまで漕ぎつけたが、大隈外務大臣への狙撃事件により中断となつた。またそれ以前の、日本での一連の条約改正交渉においても

(一八八二—一八八七)アレクサンダーは常に井上馨外務大臣及び外務次官青木周藏を日本側の書記官、秘書官として補佐していた<sup>注3</sup>。新たな改正された条約は実質的に発効したのが一八九九年とすれば、実に二八年に亘って、アレクサンダーは一連の条約改正交渉と関わってきた。

このような重要な点は、今まであえて取り上げの方が少なかったようである。しかしアレクサンダーの膨大な資料、日記、書簡および論文や新聞記事等の原文を点検していくと、やはり日本の歴史においても、また日本とヨーロッパとの交流史においても無視できない、何らかの形で書き留める必要があるように思われる。そう思つて、自らの非力を顧みず、日本の外交史の専門ではない筆者が無謀にもこれに挑んでいる次第である。ただ筆者はドイツ語を始めいくつかのヨーロッパ語とも親しんだ関係で、これは自らに残されている課題の一つと考えるようになった。その点理解ある読者は察していただきたい。

ところで、アレクサンダーはこのような仕事だけで生涯を終えたわけではない。彼も時代の子である。日本のお雇い外交官として、ますます難問、重要な案件が降りかかってきた。今までも外交問題のほかにさまざまな国際的な、文化交流的な問題と彼は取り組んできた。残念ながらそれらを具体的に詳細に取り上げる機会はなかった。それは別の機会として、今回はまさに日本がいわば諸外国、欧米の列強国と対等に肩を並べて、国際社会の真つただ中に突入し始めた時期にあたつてゐる。つまり前稿でも指摘したように、日英通商航海条約が新たに調印されたまさにそれと同時に、地球の反対側では、日本と清国との間で戦争の火ぶたが切つて落とされたのである。いわゆる日清戦争の勃発である。それからこの、朝鮮そして中国の東アジアの地を欧米の列強国がさまざまな利害関心から活動の、進出および占領の舞台とするのである。日本も欧米列強国と同じように、帝国主義的な、植民地主義的な行為をここに展開するのである。のち一〇年後の日露戦争、さらにはまた一〇年後の第一次世界大戦も、さらにはその後の第二次世界大戦もここ東アジア、中国、満州、朝鮮がいずれも戦争の舞台になつてゐる。

今回は、アレクサンダーとの関連で日露戦争までの時間帯を一応の視野に入れて考察したい。つまり、その両大戦の間に、アレクサンダーはヨーロッパにあつて、どのように公的に行動したのか。具体的に、外交官、通信員、またジャーナリスト、文筆家としてどのような文書を書いているか。さらにはそのような活動や資料・記録の中から、彼は当時の日本の外交や政策をどう捉え、どのように提言や批判を試みているか。これらの問題にこの稿では取り組んでいきたいと思う。その前に、その前提として、まずは当時のアレクサンダーの公的な生活および、日本、東アジアおよびヨーロッパの当時の情勢を少しアウトラインだけは踏まえておきたいと思う。

## Ⅰ. アレクサンダーの公的な生活と当時の世界情勢

ちょうどロンドンでの条約改正交渉のさなか、突然日清戦争が勃発した。これによりアレクサンダーにはまた新たな重要な課題が日本の外務省から言い渡された。と同時に、彼は自発的に積極的にこの課題にためらわず取り組んだ。それはアレクサンダーが日本の外務省の公文書を踏まえて、ヨーロッパの通信社に正しく、そのままに伝えることであつた。それと並んでヨーロッパの通信社および新聞社等の報道機関を監視し、必要とあらば、訂正や補正を求めるものであつた。もちろん従来からの、平和時でも、月に一度、日本に関して報道された主要な新聞記事を日本の外務省の場合によつてはコメントをつけて送付する慣例はそのまま残っていた。ましてや、日清戦争直後日本の植民地的な、領土占領の行為にたいして、イギリスを除いてドイツ、フランスそしてロシアが三国同盟を締結したので、アレクサンダーから可能な限り正確な、詳細な情報を日本政府は手に入れたかつた。

一八九四年七月一六日、日英通商航海条例調印が行われ、領事裁判権の廃止と関税の引き上げが実現した。それからちょうど十日後、矢継ぎ早に日本からロンドンに電報があつた。アレクサンダーの日記は記している。

七月二十四日（火）昨日ニュースが入った。日本は国王（朝鮮）の城を包囲した。朝鮮人たちは日本人に発砲した。その後相手側に火が上がった。

七月二十六日（木）日本人と中国人との衝突についてさまざまな噂。

七月二十七日（金）いわゆる宣戦布告。

七月二十八日（土）公使館へ。陸奥の電報、日本船と中国船との衝突があつた。（注4）

そしてその後すぐに自らもこの日本の命運を賭けた事件に、彼は一人の日本の外務省の外交官として日本の立場を明らかにする。

七月二十八日（土）朝鮮問題に対して日本が取る立場について論文を書いた。

七月三〇日（日）郵便輸送船が没した際の不正な流血の事態について新聞にはいろいろと不快なニュースが載っている。・・・その夕方その船は英国の国旗をつけていた。状況ははっきりしているようだ。日本に打電。国際法に則った戦争をし、中国との通商条約を破棄し、中国に宣戦布告を強いるように。（注5）

と、日本の外務省にさつそく提言している。このように、条約改正交渉が一段落したと思う間に、新たな重要な難問が降りかかってきた。その後この日清戦争後、かのドイツ、フランスそしてロシアによる三国同盟で日本は中国から撤退を余儀なくされた。またその後、日本が譲歩したその間隙を縫って、ロシアが不当にも日本の一時占領した満

州の港を占拠した。そういう経緯の中で、アレクサンダーは一人ヨーロッパにあつて、日本の立場を正しく客観的に伝えるべく論陣を張った。ドイツを始め、オーストリア、イギリス等のさまざまな新聞に記事を投稿した。

残念ながらそれぞれの新聞記事に今では当たれないが、当時アレクサンダーが日本の立場をどう伝えていたか、彼自身はどう考えていたのかは、ほぼ、のちの一八九八年から一九〇〇年までに『東アジア』(Ostasien)に連載されていた一連の論文からうかがい知れよう。その辺の所はのちに一括して取り上げるとして、アレクサンダーの日記には大体日本の外務省からの電報の内容が記されている。日清の和平交渉が難航して、同年十一月二十四日には旅順が、翌年九十五年二月六日には威海衛が、そして三月九日には牛荘が日本によつて占拠されたと記している。この点についてはアレクサンダーは成り行きを見守るしかなかった。しかしことが三国同盟というドイツが日本を相手に反対側に立つたことについては、アレクサンダーは懸念している。

一八九五年四月二七日(土) いろいろ考えて、次のような状況の理解に達している。ドイツの外交は注目すべきほどに侵害している。東アジアでの衝突は避けられないとの確信の下ドイツはロシアに有利にことをおこし、ヨーロッパでの戦争を回避しようとした。ドイツが加盟したことにより、爆発の代わりに燃料が長く燃え始める。最悪の場合には戦争が地域化する。(注6)

結局日本は三国同盟にあつて、中国からの撤退を余儀なくされた。当時日本の国民も等しく辛酸をなめたに違いない。しかしのちに見るように、アレクサンダーはむしろ日本の勇氣ある、平和的な撤退を長期的な見通しに立つて積極的に見ている。それはのちに見るとして、その後もアレクサンダーの公的な仕事はますます重要なものになっている。というのも、三国同盟の行きつく先がだいたい変わってきたからである。日本は確かに日清戦争後、台湾を植民地

化したが、満州や渤海湾の周囲は、希望通りに行かなかった。まずドイツは青島を含め膠州湾を占領した。フランスは広州湾を租借した。そしてロシアは日本がかねてから狙っていた大連と旅順を租借した。三国同盟には加盟せず、中立的な立場をとっていたイギリスも、日本が一時占領した威海衛を租借した。何のことはない。列強国は自らの利益のために日本の満州進出を力を合わせて阻止したのである。特にロシアは日本が狙った満州の港の拠点<sup>（註）</sup>を占領し始めた。当時の日本人の、ロシアに対する公憤はいかばかりであったか、想像に難くない。日本人が信頼していたドイツばかりか、イギリスまでもが日本の中国進出に大きく立ちはだかつたのである。しかし当時日本には一部というか、心あるものには、満州からの撤退やむなし、という声もなくはなかった。結果的に日本が三国同盟の主張を呑んで、撤退したことは、賢明な、理にかなった英断と言つてもよいのではないか。しかし日本政府はどうしても、ロシアの南下政策、ウラジオストクばかりか、朝鮮および満州にも彼らの不凍港を求める野心的な政策には異を唱えないわけにはいかなかった。東アジアの状況も変わってきた。ロシアではなんとシベリア鉄道がほぼ開通した。そこから満州の大連、旅順につながるルートも計画されている。ということで、日本は結果的に三国同盟に加盟しなかったイギリスと同盟を結ぶ選択をしたのである（一九〇二）。

ところでこの、ロンドンで締結された日・英同盟には、アレクサンダーは現地には派遣されなかった。日・英同盟の締結にあつては、アレクサンダーはドイツで日記にひとこと書き留めているだけである。「一九〇二年二月一三日（木）日本と英国の同盟が公表された。興味深い<sup>（註）</sup>」。アレクサンダーは確かにこの同盟の交渉には同席しなかったが、その前に日本の使節団がヨーロッパに到着した時にすでに政府や軍の要人たちとローマで面会している。彼の日記によると、一月一七日（金）には伊藤博文と、一月一八日（土）には大山 巖・捨松夫妻と会っている。

当時のアレクサンダーの生活は、以前のように必ずしも駐独日本公使館付きではなかった。日清戦争や条約改正交渉のように、極めて重要な案件がある場合は、アレクサンダーはベルリンに滞在し、日本公使館で公務に専念する。

そういう場合は必ず公使館からベルリンに至急来るよう連絡が来る。しかしそれ以外はベルリンから離れた私宅で、家族とともに過ごしている。あるいは休養のためか私的なことのためヨーロッパのどこかに旅行している。比較的、身分は自由の身であつた。もちろん毎月定期的に日本の外務省からローマの日本公使館を通じて給料が出る。日清戦争で日本が勝利した後、報奨金としてアレクサンダーにそれなりの金額が与えられた。ではこの頃は毎日悠々自適の生活を送っていたかと言うと、必ずしもそうではなかった。むしろプライベートルな生活面でも、公的な生活面でもかなりつらい生活を余儀なくされていたというべきかもしれない。

まず私的な生活であるが、アレクサンダーが四三歳の時、一八八九年、一五歳年下のエリザベート・ヘースリングゲンと言う伯爵の娘と結婚した。そして二人の間には、九一年より九七年まで四人の子供、三人は娘、一人は男子が生まれた。ところが、彼の妻エリザベートが第四子を生んだ後から、だんだんと様態が悪化し、入退院を繰り返し、転地治療を重ねていた。アレクサンダーはもちろん、その身内親族も懸命に介護し、看護したが、その甲斐もやむなく、一八九八年二月一八日、エリザベートは家族のものに見守られて、息を引き取った。享年三七歳であつた。それからというものアレクサンダーは父親一人で四人の子供の世話をしなければならなかった。しかしながら比較的自由な身分とはいえ、必要とあれば、ベルリンに駆けつけなければならぬ。ベルリン滞在もどのくらいかかるか、わからない。子供たちのために、家政婦や料理人を、場合によっては家庭教師さえも雇わなければならない状況に置かれた。そもそもアレクサンダーは弟ハインリヒが南チロルのエツパンにフロイデンシュタイン城を終生の住処としたようにドイツのどこかの城を捜していたようである。しかしそれがなかなか思うようにならなかった。アンスバッハやウルム近郊やヴェルツブルク近郊で間借りをしていたが、適当な物件と言うか城は見つからなかった。最後にはベルリンを終の棲家にしようとしてまで考えていたようである。そんななか、四人の子のうち一人が幼くしてこの世を去った。こういうごく個人的な私生活もアレクサンダーの生活の中に秘められていた。それともう一つ、この時期のアレクサン



ダーの生活の部分として地味ではあるが、堅実な文筆活動があった。特に注目しておきたいのは、一つには弟ハインリヒと協力して父のライフワーク『日本』を新しく改定することであった。もう一つは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてドイツで出版された『東アジア』(Ostasien)の刊行を助成し、自らもそこに寄稿するというものであった。これはなんと日本人玉井喜作によってドイツ語で編集出版された、当時でも今でも例を見ない雑誌であった。実はこの『東アジア』と言う雑誌にアレクサンダーはほぼ毎回、定期的に、時には「ナルタキ」と言うペンネームで寄稿した。日清戦争、日露戦争前夜、さらには日本の不平等条約改正について、健筆を揮ったのである。これらの論文や記事の中にアレクサンダーがこの二つの戦争をどう見ていたのか。彼はこれを通じて日本を積極的にせよ、消極的にせよ、どう捉えていたのか、ある程度うかがい知ることができよう。そしてその戦争前の、日本の条約改正交渉は、アレクサンダー自身がいわば人生のライフワークのごとく、その最初から終わりまで、深く密接に関わってきたという意味で、まさにこれは看過できない。

その前に、アレクサンダーの日記に戻るとしよう。一九〇四年の日露戦争の火ぶたがいよいよ切つて落とされたその前あたりから検討するとしよう。

日・英同盟が成立して、ヨーロッパでの情勢も緊迫してきた。ロシアとフランスはもちろんその同盟に反対の立場を取った。そのような状況下で、駐ドイツ日本公使館は井上勝之助公使および秦書記官を中心に日本の立場を特にドイツに理解を求めて、情宣活動を展開していた。アレクサンダーも当然一役買っていた。ドイツのヴォルフ通信社、イギリスのロイター通信社、フランスのアッヴァス通信社およびウィーンの通信社と彼は事前に太いパイプを持っていた。彼もこれから風雲急を告げる事態が待っていることを薄々感じていたようだ。東アジアではこの間、中国の満州、朝鮮で、日本とロシアが戦火を交える事態が刻一刻と近づいていることを、日本公使館に外務省から送られてくる情報によつて彼にはわかつていた。そして一九〇四年一月八日の日記には直接小村寿太郎外務大臣から「日本の利



益のためにドイツとオーストリアでの情報に影響を与えるように」<sup>(注8)</sup>との電報をアレクサンダーは受け取っている。日本政府がいかにヨーロッパでの情報戦略を重視していたか、その任をアレクサンダーに委ねていたかがうかがい知れる。アレクサンダーは日本の外務省から直接公的に情報を受け、その後ヨーロッパの各通信社、各公的機関に送っていたのである。

一方満州では、ロシアが大連と旅順を支配下に置こうとし、当地の日本人の生命が脅かされることになった。そしてロシアは日本人を退去させるため、宣戦布告した。その時のアレクサンダーの日記はこうである。

二月四日（木）井上の所に。電報あり。ウラジオストツクの司令長官は日本の領事館に知らせた。場合によつては占拠の状況が宣言され、全ての日本人は去らねばならない、と。チェーファーからのニュース、ロシア艦隊はポト・アーサー（旅順）を出港した、艦隊はヤルー（鴨緑江）に向かっていると。新自由通信社の代表者に、日本の宣戦布告の根拠についての私の記事を渡す。小村男爵に書簡を送った。<sup>(注9)</sup>

翌々日の二月六日にはザンクト・ペテルブルクでの日・露の外交的な交渉は決裂し、ついに両国は戦争に突入した。その経緯を日本の外交文書を基にして、アレクサンダーは情報を発信した。その甲斐もあつて、二月一五日の日記には、「朝の新聞は日本について好意的な記事を載せている。」<sup>(注10)</sup>とある。このようにヨーロッパでは少しずつ日本の味方につけることにアレクサンダーは貢献している。以後、日本から送られてくる戦争の状況をその都度日記に書き留めている。四月一七日の日記には「東郷元帥の、旅順への八回にわたる攻撃についての報告書を受け取った」<sup>(注11)</sup>とある。こういう公的な情報は逐一ヨーロッパの通信社に送り続けた。戦況が長引き、一進一退の攻防を繰り返していた。しかし七月四日には旅順での日本の進撃、二〇三高地での日本の勝利のニュース、さらには

一九〇五年五月二八日から二九日にかけての日本海海戦。最後にはアメリカのルーズベルト大統領領幹旋による日・露講和会議に至るまで、日記には要所要所書き留められている。日本がこのように激戦の末ロシアとの戦争に勝利したことは、彼はもちろん日本の外務省の一員として少なからず喜んだに違いない。普通のヨーロッパ人の中にも日本の勝利を快挙として歓迎していた人は少なくなかったであろう。しかしアレクサンダーはこの日露戦争を含め、以前の日清戦争をヨーロッパの地で観察あるいは傍觀しつつ、何か別のこと、日本が変わっていくこと、を洞察していたように思われる。このことが、ちょうどこの二つの大戦の間に書かれた一連の論文の中に窺われるように思われる。これからは章を変えて、アレクサンダーのもう一つの大事なソフト面、つまり日本觀、國家觀、あるいは文化觀と言ったイメージの方にも目を向けていきたい。

## II. アレクサンダーの日本觀

### 1. 不平等条約を経た日本像

一八九九年七月一七日、最大の難関であつたイギリスと日本との間について通商航海条約が実施された。これによりすべての条約国がこれに倣つて、日本と対等の、平等な關係になつた。岩倉使節団の交渉から含めると、優に二六年、井上馨外務卿による最初の交渉（一八八二年）から数えると、一七年の長い歳月が流れた。ほかの国にこれほどの長きにわたつて、交渉が続いた事例はほとんどないのではないか。これによつて、領事裁判權の廃止、内地雜居、関稅自主權等が承認された。日本はこれにより、實質的に歐米の列強国とすべての意味で對等に肩をならべるに至つたのである。日本人なら誰でも喜ばずにいられなかつたに違いない。条約改正交渉の当事者であつたアレクサンダーも、また別の意味で感慨深いものがあつたであろう。すでに日・英通商航海条約が、調印された段階から、自分の与

えられた使命を果たしたと自負があつたであらう。また普通の日本人とは異なる意味においてもこのことは歓迎すべき、積極的なことと彼は確信していた。一八九八年から一九〇〇年まで公刊されていた月刊誌『東アジア』には『ヨーロッパの国際法への日本の加入』(Der Eintritt Japans in das europäische Völkerrecht)でほぼ毎回寄稿している。その冒頭、アレクサンダーは、非キリスト教的な国の例として、トルコを比較のため引き合いに出している。その上で日本の他に類を見ない画期的で先見的、先進的な外交行動を高く評価している。

トルコは時代になつた改革を実施することによりトルコの国をキリスト教的な近代的な意味における国家に改革することができなかった。・・・それに対し日本はヨーロッパ以外の最初の国として、長年の努力により、来年から発効する最近取り交わされた条約によつて、西側列強国側でその完全な国際法的な権利を承認されるところまでこぎつけたのである。(注12)

そしてこのような国造りを成し遂げようとする日本を、大きくその二つの利点でとらえている。一つには日本固有の高い文化と、もう一つは、ヨーロッパの別の文化を自らの固有の文化に取り入れる、彼の言葉でいえば接ぎ木する能力にたけていると彼は強調している。

日本帝国には他のすべての非キリスト教の国々に先んじて、古い日本の文化を所有している利点がある。それは明治維新の始めにすでに非常の高い段階に達していた。そのためヨーロッパ文化の高貴な苗を日本の古い幹に接ぎ木することに何ら困難なく成功したのである。(注13)

という出出で、その日本の古い文化の基礎として、イスラムの国々のイスラム教、他の東アジアの国々の儒教と同じように、仏教を挙げている。ただし江戸時代の天草の乱等のキリスト教徒への迫害は間違いで、本来の仏教の「根本原理は寛容」と断言している。そして、幕末の諸外国との条約締結にまでさかのぼって、領事裁判、最惠国条項等日本に不利な事実を指摘。と同時に、当時の江戸幕府は条約の廃止の期限を条約に盛り込むことを忘れたその失政をアレクサンダーは挙げた。政府が変わり明治になっても、同じ状況が支配したが、少しづつ日本人の手によつて状況の改善が見られなくなかったこと、つまり一八七七年に前島密等の尽力により、日本が国際郵便連合に加盟したことが挙げられている。

その後、アレクサンダーは日本の特異な身分制度、階級制度を封建時代にまでさかのぼっている。そして外国人には理解しにくい、皇帝に二人いること、つまり精神的な皇帝と武力を誇る征夷大將軍がいることを説明する。その後には江戸時代の封建制から明治時代の君主制にいかに移り変わったかを、また明治時代にあつても封建制度は一度には克服できなかったこと、その残滓が残り、それがたとえば土族の問題として新政府にも大きくのしかかっていることを指摘する。このようにしてアレクサンダーは一気に条約改正交渉の経緯に具体的にアプローチしていない。明治時代初期の状況、廃藩置県、軍隊、国民皆兵、明治政府の実態そして教育學問、さらには宗教、仏教、神道、儒教さらにはキリスト教と言うように、明治時代を総合的に描いた。そして一つの結論として、「日本はこの最短の時間の中でヨーロッパの発展の数百年間を一気に飛び越えた。そしていまや近代的な意味においての法治国家に変わる途上にあるのである。」<sup>(注14)</sup>と彼は書いている。

そしてこのような明治時代の総合的な把握を踏まえて、日本の法律に話は移っていく。ここでも歴史的な考察が続けられる。日本の刑法は大体、中国を模範としていた。また明治の初期にもうすでに、日本人および外国人の手になる新しい近代的な法、刑法、民法そして刑事訴訟法が挙げられる。日本人の名としては、江藤新平、外国人としては

フランス人の法律家にして日本政府の顧問ボアソナードが挙げられる。後者はフランスの民法典を下地にして民法の原案を作成した。しかしこれだけでは近代的な法としてはまだ不十分であつた。のちの井上外務卿が主催した欧米列強国との第一回の条約改正交渉において、日本の法律は近代的な法として彼らから受け入れられなかった。伊藤博文がその命を受けてヨーロッパに各国の憲法調査に旅立つたのも周知の事実である。その際ドイツやオーストリアでアレクサンダーが伊藤および彼の部下たちの共同作業にいかにか協力したかは、前に見たとおりである。<sup>〔注15〕</sup>

ところで一八九九年にやっと発効するまでの長い、苦難に満ちた道のりがアレクサンダーによつて独自に再現されるが、いくつかの点が注目に値する。当事者ならではというか、日本とドイツ、ヨーロッパに跨つていうか、独自の目の付け所がある。一つには、ある時期は日本での団体交渉、またある時期は各条約締結国での個別的な長い交渉で、見えてきた次の点である。つまり大体において、ドイツは最初から日本の主張、要求に対して比較的理解を示してきたこと、それに対して最後まですべての案件で執拗に反対の立場をとり続けたのが英国であつた、との点である。「ドイツ人は日本の要求を承認する傾向にあつたが、イギリス人は現状維持に固執していた。これが交渉を重ねるとますます明らかになつた。」<sup>〔注16〕</sup>との指摘である。英国の調印が最後の最後まで遅れたというのもその辺の事情を物語つていよう。もう一つは、ふつう日本では不平等条約改正の最大の功績者は、各国との通商航海条約の調印がなされた時点の外相・陸奥宗光と相場が決まつている。しかし、アレクサンダーの目から見ると、むしろ最大の功績者は、井上馨と並んで、むしろそれ以上に青木周蔵を挙げている。

日本の外交官の数名は、とりわけベルリンの公使、青木周蔵伯爵は有利な人脈を使う心得があつたその技量ゆえに、日本政府は幸いにも他の非キリスト教国よりも一歩抜きんでて、外国に対して、特に行政の領域で、国家主権を行使する認可を受けたのである。<sup>〔注17〕</sup>

それは同時に、日本にあつても、ドイツやイギリスにあつても常に直接にせよ間接にせよ、アレクサンダーが青木周蔵の腹心、側近、懐刀として行動を共にし、意見情報を交換していたからこそ、言えるのであろう。と同時にこれらの言葉の背後には、アレクサンダー自身の裏方としての貢献も見えて取れなくはない。

この論文の最後に、一八九九年七月三〇日付の明治天皇の勅語、詔を引用している。新たな条約が発効した直後のことである。一部引用すると、

我々は喜びをもつてそして心からなる満足をもつてこの時を迎えることができる。そして一方では新たな状況が我々の帝国に課するその責任を間違えることなく、他方ではこの新たな状態が必ずや諸列強国との友好関係を、今までなかったようなしつかりした基礎の上に築かれんことを、希望する。(注18)

こう見てくると、アレクサンダーは新生日本、近代国家の一つとしての日本を全面的に称え、期待しているように思われるかもしれない。事実、文化面、宗教面では異なっているが、制度面、ハード面では日本は欧米列強国と肩を並べるに至ったことは、アレクサンダーも素直に認めている。しかし実際の、日本が東アジアの近代的な帝国として対外的に、特に同じ東アジアに対して具体的にどのような行動を取ったか、を彼が遠くヨーロッパの地から見たとき、彼はどうか考えたであろうか。日清戦争および日露戦争に至るまでの日本の行動を彼はどのように捉えていたか。これと同じ『東アジア』に連載されたもう一つの一連の論文、記事から見るとしよう。

## 2. 『東アジアの地平線上の政治的回覧』に見る日本像

この作品はアレクサンダーがドイツおよびヨーロッパのドイツ語圏の読者を対象としてほとんど毎月『東アジア』

に連載したものである。タイトルもさまざまである。念のため年代順に並べるとしよう。ある時はナルタキと言うペンネームで、またある時には匿名で書かれている。『中国での英国の政策』（一八九八年七月）、『東アジアでのロシアの立場』（一八九八年八月）、『イタリアと中国の不和と東アジアの状況』（一八九九年四月）、『日本における通商政策的な展望』（一八九九年四月）、『東アジアと平和会議』（一八九九年五月）、『外国人との交流のための日本の内地の解放』（一八九九年八月）、『いわゆる日清同盟』（一八九九年九月）、『日本にいる外国人の状況と中国での布教活動の問題』（一八九九年一〇月）、『日本と中国の国民経済的な状態』（一八九九年一二月）、『南アフリカ戦争の、東アジアの状況への影響』（一八九九年一二月）、『ドイツの海軍の世界政策、ドイツと日本の利益の東アジアでの共通性』（一九〇〇年一月）、『中国における門戸開放政策』（一九〇〇年二月）、『北京における宮廷革命』（一九〇〇年三月）、『日本における条約解釈の問題』（一九〇〇年四月）、『積極的な国際法への日本の貢献』（一九〇〇年四月）、『朝鮮における日本とロシア』（一九〇〇年五月）、『中国の混乱』（一九〇〇年七月）、『中国の状況』（一九〇〇年八月）、『東アジアの状況』（一九〇〇年九月）。

このように時代的に日清戦争前夜から、日露戦争前夜まで、東アジアの地で展開する欧米列強国と日本の外交政策をこのように列強国別に、またそれぞれの列強国の利権が複雑に絡み合うその現実をアレクサンダーはヨーロッパに提示している。もちろんそれには、日本の外交官として、日本から与えられた資料を基に、日本の側に立つて、発表したことは否めない。しかし『東アジア』はそもそも日本政府の機関紙、広報誌ではない。玉井喜作があくまでも個人的にベルリンで刊行を始めたドイツ語の総合雑誌である。アレクサンダーは当初より玉井の活動に賛同し、出資金まで出している。その中では、アレクサンダーが自由に、縛られることなく当時の日本について発言している箇所が少なくない。その辺を基にして、アレクサンダーの、大日本帝国についてのイメージ、考えがどういうものであったか、この論文の最後に探るとしよう。



まず日清戦争の勃発当時、日本の清国に対して宣戦布告したのは、国際法に則つての行為であつたことをアレクサンダーは強調している。

我々はここで、おそらく歴史において初めて大きな戦争の事例を見る。そこでは命令する司令長官の傍らに法律家がいる。彼は司令長官の、中立的な国々やその国民たちについても、また敵に対してもその法的な行動、さまざまな行為に働きかけた。特に前者に関して、ヨーロッパの国際法に通じている専門家をその責任ある地位につけたのは、日本にとつて特に卓見であつた。なぜならば、このような方法で、戦争を国際法と人道の原則に則て、行使し、そして他の航海をする国々との不必要な紛糾を避けることができたからである。<sup>(注19)</sup>

したがつて、約千五百名の清国の兵隊を乗せた英国籍の船を日本軍が撃沈したことは、国際法に適つているという。こうしてここでも日本が国際法を遵守していることを、アレクサンダーは一貫して積極的に評価している。しかし、そもそも、すでに日・英通商航海条例が新たに調印されようとしたその時点で、アレクサンダーは冷静に日記に書いている。

一八九四年七月六日（金）青木はキムベリーの所に昨日の電報を持つていく。将来のことで青木と大きな会議。日本政府は中国と一体になつてロシアに対抗しようとしている。私は中国との共同作業はない、と見ている。それに対して英国の理解は得られている。そもそも私は日本の拡張政策を軽視している。国内にはまだ十分なものがある。<sup>(注20)</sup>

他国の領土拡張、植民地支配にはアレクサンダーはそもそも最初から与していなかった。のちの日清戦争後の和平交渉が失敗し、日本は旅順、営口、牛莊、威海衛さらには台湾を要求したものの、それは必ずしもすべて叶えられなかった。中国の策略で、日本に対する露、仏そして独の三国同盟が成立した。いわゆる三国干渉である。その結果、日本はさまざまな配慮をして、戦後の賠償として台湾は植民地化するが、一方の遼東半島や山東半島のいくつかの港を占領することを諦めた。この日本政府の判断をアレクサンダーはむしろ積極的に評価している。

日本の外交政策は周知のごとく常に、中国との短かい戦争の期間は除いて、平和的、条約に忠実なものであった。中国に対する戦争が勝利した後でも、政府は、国民を非常に不満な状況に諦めさせ、それによって当時の東洋が三国同盟によってさらに紛糾するのを避けることができた。(注21)

そして日本を取り巻く環境にも言及し、アレクサンダーは日本の対外的な基本姿勢をこう伝えた。

サンディッチ諸島がアメリカ合衆国の所有に移行した時も、フィリッピンでの戦争の間も日本は最も厳格に中立を守ってきた。そして理解しがたいほどの控え目をもって満州でロシアの勢力が増加しているのを、また太平洋でアメリカの影響が増大しているのを黙ってみている。(注22)

しかし実際は、三国同盟は、日本の中国進出を共同で阻止するばかりか、かえって三国の中国進出と占拠を押し進めるものであった。旅順と大連をロシアは南下政策によって占拠し、そこに彼らの港、不凍港を建設しはじめた。そしてロシアを仮想敵国として日本はその戦争の準備を始めたのである。事実具体的に、日本とロシアの間でどうい

戦争が行われたのか、アレクサンダーの日記にも詳しいが、これは今回のこの論文の範囲を越えてしまうので、触れないでおく。ここでは、アレクサンダーの日露開戦前の日本観、そのあるべき像を最後に見ていきたい。

アレクサンダーは事あるごとに、帝国主義的な領土支配、植民地支配が問題なのではなく、自国の産業工業の発展のために市場を確保し、海外の港を貿易自由港にすべきと主張している。その意味ではドイツの利害と日本の利害は一致しているとしている。

ドイツの本当の利害は日本のそれと同様に、相互の産業のための新たな確実な市場を開放することにある。日本でもよく知られているように、ドイツは、かつて英国がインドで行ったようなやり方で、中国を自らのために一種の植民地にすることからほど遠い。ドイツと日本の利害は決して対立ではない、共通である。<sup>注23</sup>

そして中国に対しては、「日本は中国の統一とその独立を守ることと言うまでもない。日本の繁栄する貿易、航海の発展、さらにそれ以上に戦略的な安全にとつて、日本には独立した中国が必要なのである。」<sup>（注24）</sup>

さらに对中国の日本の当面の課題として、「日本の方法は、中国の保守的な精神を啓蒙すること、そこでの退廃を克服すること、無政府状態とたたかうこと、残念ながらこれがいつも中国政府の弱さのためにはびこっている。」<sup>（注25）</sup>

アレクサンダーが具体的に当時の義和団の乱を想定しているが、その際、中国通、中国の古典や歴史に通じた日本の政治家に期待している。

おそらくは伊藤侯、大隈伯爵および明治時代の若い有力者がこの分野ではヴァルデーゼー伯爵<sup>注26</sup>のために適している。今まで彼らが自国で行ったことは良く知られている。そこから彼らがこの大国の文学、歴史そして

習慣を詳しく知っているがゆえに何をするか、推し量れよう。(注27)

しかしこれはあくまでもアレクサンダーの希望的な観測であつたかどうか。いずれにせよ、日清戦争後から日露戦争前夜までは、彼は日本についてこういうイメージを抱いていた。しかし彼の公的な仕事は、日本の外務省のために働くことであつた。のちの日露戦争勃発の時も、日本の外務省を対外的に代弁しているが、事態が彼の意に沿わないこともなくはなかつたであろう。それはそれとして一応彼の日本像を纏めてみるとこうなる。

## まとめ

アレクサンダーの日本像は大体以下の通りである。

1. 日本が欧米列強国と同じように近代的な、国際法を尊重する国家になつたこと。
2. 日本が欧米列強国のように、植民地支配、他国の領土を占領しないこと。
3. その代り、殖産興業を推し進めて、他国の産業のためにも、対等に貿易を盛んにすること。
4. 外国の港を軍港にするのではなく、貿易のための自由な貿易港にすること。
5. 日本の文化面で日本の創造的で、普遍的で、独創的な伝統文化を培うこと。

ほぼこういうように、アレクサンダーの日本像はまとめることができよう。しかしこれが当時の帝国主義的な国際情勢の現実にあつて、どう変貌していったか。あるいは貫いていったのか。これは別の今後の問題である。最後にこの5の日本の伝統文化の基礎として仏教の寛容性を以前挙げてゐる。これが実は、国際的に、世界的にも重要な日本の重要な文化遺産であることをアレクサンダーは別の文脈で述べてゐる。この論を終えるにあたつてぜひ引用したい。

ところで仏教徒たちの寛容の例は、ヨーロッパの多くのキリスト教徒にも事例として役立つであろう。ドイツ、オーストリアそしてフランスの反ユダヤ主義のような、宗教の領域での半ば政治的な運動は日本では排除されている。他方言うまでもなく中国では相変わらずキリスト教の布教は最大の危険に晒されている。<sup>〔注28〕</sup>

—— おわり ——

## 注と文献

1. 牧 幸一『日欧文化交流史に中のシーボルトの息子たちⅣ』——1890年代前半のヨーロッパでの条約交渉におけるアレクサンダー・フォン・シーボルト——早稲田大学高等学院研究年史第五八号、二〇一四年三月参照。
2. 牧 幸一『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちⅢ』——日・独条約改正交渉（二八八—一八八九）におけるアレクサンダー・フォン・シーボルト——早稲田大学高等学院研究年史第五七号、二〇一三年三月発行参照。
3. 牧 幸一『日本とドイツ語圏との文化交流史Ⅵ』——第一、第二回の条約改正交渉（二八八—一八八七）における日本の外交官アレクサンダー・フォン・シーボルト——『高等学校ドイツ語教育研究会会報』第三号、二〇一一年一〇月参照。
4. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』Alexandervon Siebold, Die Tagebücher B 1893–1911, herausgegeben von Vera Schmidt, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 1999, S. 767–768.
5. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 768.
6. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 792.
7. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 1064.
8. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 1141.
9. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 1144.
10. 『Acta Sieboldiana Ⅲ』S. 1146.

- 11 『Acta Sieboldiana Ⅲ』 S. 1153.
- 12 『Der Eintritt Japans in das europäische Völkerrecht』, 『Ost-Asien』, Jg. 1 (1898/99), S. 297 (ウーレン大学東アジア研究所図書館所蔵)
- 13 右に同じ° S. 298
- 14 右に同じ° Jg. 1, IV, S. 440
- 15 牧 幸一『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちⅡ』—伊藤博文の助言者にして協力者アレクサンダー・フォン・シーボルト— 早稲田大学高等学院研究年誌第五六号、二〇一二年三月発行。
- 16 12の文献° Jg. 2 (6), Nr. X, S. 255.
- 17 右に同じ° S. 254.
- 18 右に同じ° Jg. 2 (7), Nr. XI, S. 302.
- 19 『Ein japanischer Beitrag zum positiven Völkerrecht』, 『Ost-Asien』, Jg. 3, Nr. 25, April 1900
- 20 『Acta Sieboldiana VII』, S. 764
- 21 『Japan und Rußland in Korea』, 『Ost-Asien』, Jg. 3 (2), Nr. 26, S. 56
- 22 右に同じ° S. 56
- 23 『Deutschlands Flotten- und Weltpolitik. Gemeinsamkeiten der deutschen und japanischen Interessen』, 『Ost-Asien』 Jg. 2 (10), Nr. 22, Januar 1900, S. 444
- 24 『Politik “der offenen Türen” in China』, 『Ost-Asien』, Jg. 2 (11), Nr. 23, April 1900, S. 403
- 25 23の文献° S. 444
- 26 筆者注、北京に安全を保障する政府の再建を使命とするドイツ側の代表者。
- 27 『Die Lage in Ost-Asien』, 『Ost-Asien』, Jg. 3 (6), Nr. 30, September 1900, S. 247
- 28 『Verhältnisse der Ausländer in Japan und die Frage der Missionen in China』, Jg. 2, Nr. 19, Oktober 1899, S. 298